（第3種郵便物認可）

たんぽぽ咲いた ⑤
伊佐市の挑戦

「チーム伊佐」親子見守る

自治体、医師ら協力態勢

いとこの「浩（こう）ちゃん」には知的障害がある。たこ焼きが大好きで、笑顔を絶やさない。伯母は「私が育てられると思って神様が授けてくれた」と胸を張った。

隈元新・伊佐市長(61)は大学時代、京都で浩ちゃん一家と暮らした。「あの子を大事にしたら、悪いことは起こらない」。伯母はいつも前向きだった。

笑顔で子育てできるまち。隈元市長がたんぽぽ開設を決断した原点に、浩ちゃんとの出会いがあった。人口2万9000人の伊佐市の挑戦。「私たちでもできた。だから、どこの自治体でもできる」。すべての子どもたちの幸せを願う。

＊

伊佐市の保育園。楽しそうに遊ぶ園児たちを門の陰から見守る男性がいた。小児科医の塗木雄一朗医師(42)は「病気やけがをした時だけでなく、日常生活の中での子どもたちの姿を知りたい」と、休みの日に保育園を回った。

「子育て日本一のまち」を掲げる伊佐市。隈元市長の財布には、浩ちゃん（左）と一緒に納まった写真が入っていた

大学の法学部を卒業し、家庭裁判所の調査官を目指したが果たせず、数年間、東京でフリーターをした。故郷の鹿児島で子どもにかかわる仕事をしたいと、28歳の時に一念発起して鹿児島大医学部を受験した。

医師になって3か所目の赴任先が伊佐市の県立北薩病院だった。医師や保健師、保育士が集まり、議論を交わしていた。「たんぽぽなんて」と偏見を持つ親に、発達の状態が気になる子どもたちへの療育の必要性をどうやって理解してもらうか。みんなの熱意に触発された。塗木医師の保育園巡りが始まった。

「発達障害」という診断名を伝えることが怖かった。目の前の母親がどれだけショックを受けるか。ほとんどの母親は、涙を流して動揺した。でも、次に会う時には「この子のために」と前向きに変わる。

「僕一人だけではとても診断できないし、母親も一人で腹が据わるわけではない」。医師やたんぽぽのスタッフ、保育士、保健師――。「チーム伊佐」が親子を見守る。

＊

7月5日、隈元市長は南九州病院（姶良市）の院長室にいた。同月1日付で異動になった塗木医師の新しい勤務先だ。隈元市長は「塗木先生を伊佐に派遣していただけないか」と頭を下げた。月3回の非常勤勤務が実現した。

伊佐市が近づくと、車中で塗木医師は「ただいま」とつぶやく。子どもたちの笑顔が待っている。